

## 20 回生グアムの引率を終えて

普輪崎 紗耶

グアムについて興味を持ち始めたのは今から約3年前のグアム学生交流会でした。KIRAの学生委員会に所属して、学生交流会で初めてグアムの方とお話をする機会があり、チャモロ文化についての話を少しだけ聞きました。チャモロ文化は昔からグアムにある文化だが少しずつそれを知っている人が少なくなっているというお話を聞き、チャモロ文化について興味がわきました。しかしその時は自分が引率者としてグアムに行くことになるとは全く思ってはいませんでした。引率者としていきたいと感じたのは柏市の姉妹都市トーランスへホームステイをした後でした。私にとってこの経験は自分の考えや将来に大きな良い影響を与えてくれていると思いました。そして中学生の皆さんにもホームステイをすることでほかの国の生活に触れ、新しい発見をしてほしい、そしてそのサポートをぜひしたいと思い引率者としていくこととなりました。

サポートをするうえでグアムに行く前私自身中学生のときに一人で海外にいてホームステイをするといった経験はしたことがなかったので、始めたばかりの英語でコミュニケーションをとるのはどういう方法がいいのだろうか、ということを考えていました。しかし大事なことは英語がいかにかたくさん話せるかではないということはこのホームステイを通して感じました。もちろん英語を話せるに越したことはないと思いますが、それ以上に相手とコミュニケーションをとる意思をいかに持つかということが必要だと思いました。ロレッタ先生は話すきっかけはなんでも良い、例えばお互いの言語を教えあうことなら英語をそこまで話せなくてもコミュニケーションになりお互いを知ることができる、一番大事なことは相手とコミュニケーションをとる努力をすることだ、とおっしゃっていました。私はそれを聞いたときまさにその通りだと感じました。多少の言語の間違いよりもとにかく話すこと、伝えようと努力をすること、それがコミュニケーションをうまく運ばせてくれるのだと感じました。そしてこのことはこれからのグローバルな社会に必要なことなのではないかと感じました。

自分自身引率者という立場できちんとできるのか、という不安は行く前にすごく感じましたが、グアムでの滞在の最終日派遣生たちから「まだ帰りたくない、ここにずっといたい。」という言葉が聞くことができ本当にうれしかったです。

このような素晴らしい派遣事業のサポートをしてくださったKIRAの方、セントフランシスの方、グアムでお世話してくださったホストファミリー、保護者の皆様、そして団長としてリードしてくださった小金澤さん、派遣生のみんな、カウンターパートたち、そのほかにも私たちをサポートしてくださったすべての方々に感謝いたします。本当にありがとうございました。



恋人岬にて